

病草紙にみられる疾患とその今日的意味

荻野 篤彦

病草紙との出会い

平成10年の夏、高崎市で皮膚科を開業している服部瑛氏から一卷の絵巻物のコピーが届けられた。この絵巻物は先生の友人である群馬県立歴史博物館の唐澤至朗氏から預かったもので、多数の皮膚病が描かれているので医学的に解釈して欲しいとの依頼であった。しかし、この絵巻物には内容を説明する詞書が全くついておらず、後でわかったことであるが、このような絵巻物は詞書のある「病草紙」とは区別して「異本病草紙」と呼ばれている。先生はこの絵巻物を皮膚科医としての立場で解釈をすることを試み始めたが、他の皮膚科医の意見も聞きたいということでわたしの元にそのコピーが送られてきたというわけである。

病草紙について

平安時代末期には地獄草紙や飢餓草紙などの絵巻物に克明に描かれているように、世は乱れ、飢餓が繰り返し起こり、疫病が流行し、仏教界では末法思想が流行った。同じころに描かれたと思われる絵草紙の「病草紙」には、貴族階級から庶民にいたる幅広い階層にみられた病気や、奇病とされた珍しい疾病について鋭い観察眼をもって絵画化して描かれている。絵の脇に詞書がついており、その時代の病気に対する解釈がよく理解できて大変興味深いものである。病草紙の絵図は医学的な興味で扱われたというよりも、人々が見て楽しむ現代のいわゆる写真

週刊誌のようなものであったと推測される。

関戸本は21図に分断されて各地に所蔵されており、このうち9図は京都国立博物館に分蔵されている。これら絵巻物は鮮やかな線描と美しい彩色で見事に描き上げられており、美術品としても価値が高いものであり、幾枚かは国宝に指定されている。

異本病草紙について

一方、関戸本とは異なるモチーフを扱った病草紙が伝わっており、詞書が全くついておらず、これらは「異本病草紙」と呼ばれている。原本は残っておらず模本として4種類が知られており、最も有名なものが京都国立博物館に所蔵されている狩野探幽の模写で、39段からなっている(京博本)。鮮やかな着色がなされており、美術的にも価値が高いため重要文化財となっている。そのほか狩野春川の模写になる東京国立博物館蔵本(東博本)、大鳥蘭三郎氏所蔵の鷹巢英峰の模写本(大鳥本)がある。今回、服部氏から送られてきた絵図は安永4年(1775年)



図1. 路上の死屍に寄りつく狂女

に権中納言某が土佐派の光貞筆写本を岩城宗三に命じて写しとらせた模本で、医官の錦小路家に伝えられており、やはり詞書を欠いている。着色はされていないが、絵図の所々に原本の色彩がメモ書きで記入されている。

「病草紙」が珍しい疾患をユーモアを交えて描いているのに対し、「異本病草紙」は病気を治療する場面や病人の介護にあたる人たちを写實的に描いており、当時流行していた疾病やその治療法についても詳しく知ることができる貴重な資料である。

異本病草紙の医学的解釈について

詞書を欠く異本病草紙を医学的、とくに皮膚科医の立場から解釈をこころみた。36段の絵図とその医学的解釈は服部氏が群馬県医師会報に分割した論文として数号にわたって投稿しているので参照していただきたい。

病草紙がつくられた時代の世相について (平安時代末期から鎌倉時代)

当時、飢餓や疫病が流行ったために「死屍をかじる狂女」に見るように、路上には死亡した多くの人たちが野晒しの状態で放置されていたようである(図1)。本朝世紀(993年)や日本略記(1000年)には、数多くの痘瘡による死者が路頭に満ち溢れていたと記載されている。このような悲惨な疫病の流行はその後も京の街を襲い、多数の死者は町中にあふれ、さらに川には掻き流さなければ動かないほどの数の死体が浮かんでいたという。1180年には諸国は大旱魃にみまわれ、翌年(養和元年)には大飢饉となってあらわれた。鴨長明は方丈記に、京都の一面で2ヵ月間に4万人の餓死者が出たと明記している。死屍に齧りつく女を狂ったためとみるのか(ものの気)、飢饉のために人が人を食うというあさましい状況になったことを示すのかは定かではない。不気味な光景を一般庶民は興味深げに取り巻いて見物しており、これは当時ごくありふれた出来事であったのであろう。



図2. 麻疹にかかった小児と心配そうに見守る家族

「庭先に放置された黒い死体」は平安時代に相次いだ僧侶の焼身を描いたものであろう。焼身は死霊の鎮魂を目的とした行と考えられており、正式の得度・受戒を受けていない聖と呼ばれる私度僧によって行われた。このような苦行は人々の罪を償うという贖罪観念に基づいていたものといわれている。

「陰門部を棒でついている女」はあたりに白骨化した骨が散らばっている姥捨山に置き去りにされた老婆が陰部を棒でついで死のうとしていた図である。女性が陰部を棒状のものでついで自殺することは日本の古典に見られることで、当時、絵図のような凄惨な行いが見られたのであろう。これらの絵図を見ると死は庶民にとって日常の出来事であり、ときには自然の成行きとして達観していたのではないかと考えられる。

疫病(えやみ)の流行

発疹症を描いた絵図として「全身に発疹を生じた女と看病する家人」、「発疹症にかかった男」、「麻疹の幼児を看病する女たち」の3つがある。当時、流行していたと思われる発疹症として痘瘡、麻疹、水痘、風疹などが挙げられる。痘瘡は仏教などの外来文化とともにおもに朝鮮半島からもたらされたもので、奈良朝時代天平7年(735年)に九州北部から流行が始まったとの記録が「続日本紀」にある。はじめ豌豆瘡



図3. 全身に発疹を生じた女と看病する家人達

(ワズカサ)あるいは裳瘡(モカサ)と呼ばれていたが、平安時代には皰瘡と記載され、鎌倉時代には疱瘡、赤斑瘡と呼ばれた。赤斑瘡は麻疹を指す言葉であるが、当時、人々の栄養状態が悪く、麻疹に罹ると肺炎などを併発して死亡することが多く、当時の人々には痘瘡との区別が困難であったことから、記録のうえでも混乱が見られる。痘瘡と重症水痘は鑑別が難しいものがあるが、錦小路写本の23図の女性の顔面には発疹がみられず、四肢と体幹にのみ生じており、痘瘡よりむしろ重症水痘とする考えがある。しかし彩色された京博本では顔面にも皮疹が描かれており、やはり当時もっとも恐れられていた痘瘡とみるのが妥当であろう(図2、図3)。

感染症として「両下肢が腫脹した女」と「陰囊が腫大した男」の2図がある。前者は象皮病で(図4)、後者は陰囊水腫と思われるが、いずれもバンクロフト糸状虫感染症による病状である。蚊が媒介する糸状虫感染症である陰囊水腫や象皮病は当時かなりひろく流行していたと思われるが、わが国ではその後ずっと、暖かい地方でわずかにみられていたが、最近、激減し、稀な疾患となっている。異本草草紙では陰囊などの外陰部の皮膚病がはっきりと描かれており、25%の図において男女の外陰部が隠すことなく写實的に明瞭に描出されており、それがこの絵巻物の特徴になっている。



図4. 象皮病を患った貴族の女

病草紙「女から毛虱をうつされて剃毛している男」は娼婦からうつされた毛虱症であり、シラミは睫毛までのぼると正確に記載されている。剃毛することが治療法のひとつとして描かれており興味深い。

色素異常としては病草紙「貴族の女性のあざ」は太田母斑と思われるが(図5)、当時、このようなあざをもった女のひとは人前に出て振る舞うことが難しかったと書かれている。病草紙「先天性白皮症の女」は鼓をもつ大道芸人の女を描いたもので、笑い囃す人々に囲まれながら道を歩いているさまが生々しく描写されている。この皮膚病はすべての皮膚と粘膜に色素を欠くために頭髮を含め全身の皮膚が真白になっており、「まなこ」まで白いと正確に記載されている。病草紙「下級武士の鼻黒の一家」は妻を除く家族全員の鼻先が黒いというものであり、先天性の疾患であろうとか、赤鼻の類ではないかの説がこれまでに提出されてきたが、現代の医学では理解しがたい絵図であり、鼻に墨を塗る大和の風習(祭の行事)を伝え聞いて間違って記載したものかもしれない。

皮膚腫瘍としてはレックリングハウゼン病と思われる「顔面に大きなやわらい“こぶ”を生じた女」や、脂肪腫あるいは巨大な粉瘤と診断される「背中にこぶがある女」や、鼻瘤らしい「鼻部に巨大な“こぶ”をもつ女」がある。「陰囊が発赤し腫大した男」の皮疹は単なる陰囊湿

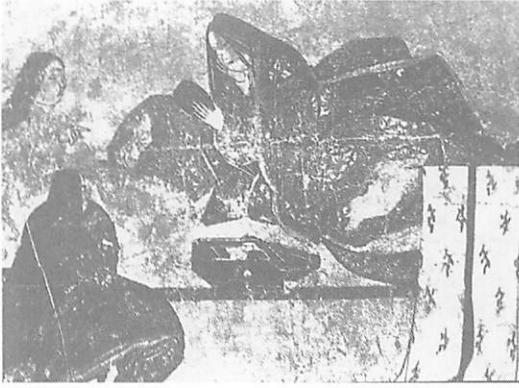


図5. 顔面の色素斑(太田母斑)を気遣う高貴な女性

疹か、あるいは珍しい皮膚癌の一種である外陰部パージェット病とも見て取れる。これらは奇病として描かれたものらしく、誇張して表わされている。当然、有効な治療法もないであろうから、まわりの家族や知人はただもの珍しげに見守り、患者はあきらめるしかなかったであろう。

平安時代の貴族ならびに庶民の日常生活と疾病

「痩せた男と食事の準備もせずに寝ている女」と「痩せこけた病人」は当時の食生活の一端をうかがわせるものである。「大食らいする男」は消渴(しょうかち)と呼ばれ、のちに飲水病といわれた糖尿病の男を描いているものであろうか。「嘔吐する男」は上流貴族で豊かな食生活をしているのに、急性消化器症状のひとつである吐瀉をしており、霍乱と呼ばれた病状である。「下痢をする女」をみると、高下駄を履いて路上で排便しており、これは当時の通常行っていた排泄行為であったのであろう。「腸痙から便が漏れ出ている老人」も手に高下駄を履き、便の後始末をする犬が登場してくる。「室内で排尿する上流社会の女」では布の上に排尿しており、大便をする清宮(しのはこ)らしいものが見える。当時は栄養不良により「あしの気」とよばれる脚気のために「両手をついて歩く男」や、あし萎えのために「車に乗せられ子供に引かれる男」がある。「腹部が異様に膨満した腹

水の女」は「腹ふくる」といわれた腹水の状態であり、穿刺されて流れ出る腹水は耳たらいに受けとめられている。

当時の疾病に対する治療法と対策

「発熱して臥せている女」は家族達の看病の場面であろう。当時の治療としては薬湯や酒を飲ませるか、皮膚病には膏薬をつけ、蒲(がま)や石灰乳療法が用いられた。痘瘡などの発疹症は大層恐れられていたが、治療法としては煎じた薬湯を飲ませるか呪いの清めの水をつけるくらいしか方法がなかった。「全身に発疹を生じた女」でも傍のひとりの女が薬湯の入った椀をもっており、指でそれを皮疹につけようとしている。囲炉裏で火が焚かれて部屋が温められており、女の患者は発熱しているのか鉢巻きをしめており、高貴な身分の家人たちが心配そうに患者を見守っている(図3)。病気になるると鉢巻きをする風習はすでにこのころからあったと思われる。

病草紙「眼病の針治療」に見るように白内障の治療として針療法がすでに行われており、「眼を洗ってもらっている男」のように洗眼らしき治療法もあったようである。「背部に灸を受ける女」は背部の膿皮症に焼灼術を受けており、灸などもすでに行われており、病草紙には「鍼治療の図」がある。

しかし、人々がもっとも信頼したのが加持祈



図6. 僧侶にまじないの文字(経文)を書いて貰う病の老女



図7. 行水を楽しむ庶民の女性たち

痔やお呪いの類であり、「疫病よけの文字を書いてもらう女」、「“おまじない”を書いてもらう幼児」のように墨で体にお経の文字を書くことがよく行われていた(図6)。また按摩も行われており「病気の男の腹部を揉む女」では腹部を巫子らしい女がマッサージをしている。

入浴(行水)は当時の庶民の健康法の一つであり、「行水する女達と子供および老婆」では行水を楽しむ人々の裸の姿が描かれており(図7)、一方、寺が大衆に浴場を開放することもあったという。

結語

病草紙と異本病草紙を医学的に解釈しながら紹介したが、当然のことながら絵図のみからは当時の疾病の正確な診断にはなかなか至らない

ものである。しかし、当時の人々の日常生活と、流行していた疾患の内容とその医療の一端が窺うことができたことから、病草紙および異本病草紙は医学的にも大変貴重な資料である。なお解釈の不明な点が多く残っているので、今後もこの仕事を続けていくことは重要であろう。

参考文献

- 1) 立川昭二：日本人の病歴．東京：中央公論社；1976.
- 2) 服部敏良：病草紙の醫學的解説．日本繪巻物全集6．東京；角川書店；1960. p. 76-77.
- 3) 服部敏良：日本医学史研究余話．東京：科学書院；1981.
- 4) 宗田一，酒井シヅ：異本病草紙．図録日本医事文化史料集成1．日本医史編．東京：三一書房；1978. 105-175.
- 5) 宗田一：病草紙．図録日本医療文化史．京都：恩文閣；1989. p. 85-87.
- 6) 服部瑛，荻野篤彦：「異本病草紙」考—その1—．群馬県医師会報．1999；608：55-57. 続発表。
- 7) 富士川游：日本疾病史．東京：平凡社；1965.
- 8) 中島陽一郎：病気日本史．東京：雄山閣；1982.
- 9) 立川昭二：近世病草紙—江戸時代の病気と医学—．東京：平凡社；1979.